



Title	始めるこの困難と展望 : 1970年代のモダニズム政治学
Author(s)	山田, 雄三
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2011, 2010, p. 7-16
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/77364">https://hdl.handle.net/11094/77364</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# 始めるこの困難と展望

——1970年代のモダニズム政治学——

山田 雄三

## 1. はじめに～時間と空間の距離を測る

レイモンド・ウィリアムズ (Raymond Williams, 1921-88) の『ボーダー・カントリー』(1960) の結末で、主人公マシューはみずから納得できる帰郷ができたと感じ、妻を相手に次のように感慨を述べている。「初めて家を出て…汽車から谷を見たときのことを覚えている。ある意味、その旅も今ようやく終わったんだ。」「たいへんな旅になる運命だったのね。」「確かにね。今やっとエグザイルが終わったように思う。戻るというんではなく、エグザイルが終わっていく感じだ。距離が測れたんだから。それが大事なんだ。距離を測ることで、僕たちは故郷に帰れるんだ。」<sup>1</sup>

これをざっと読むと、「エグザイルの終わり」は平凡な帰郷物語にはお決まりの楽観的なエンディングに見えてしまう。同じエグザイルとしてウィリアムズに多大な影響を受けたことを認めるエドワード・W・サイード (Edward W. Said, 1935-2003) も、このエンディングには複雑な思いで向き合っている。彼にとっての距離は、イスラエル建国以降のエグザイルと中東に残ったパレスチナとのあいだに横たわっていた。1977年に両者の諸代表がカairoで初めて一堂に会し、パレスチナ問題を討議するが、エグザイル会議派の代表であったサイードは、両者の距離についてこう述べている。「卑俗な言い方で、それもおそらく楽観的に「距離は測られた」などと言って、〈現実路線〉をとるようになったのとはわけが違う」と。<sup>2</sup> そして、所与の距離を想定することをやめ、両者が今立っている地点から現状打開のための一歩を効果的に踏み出すことが大事だと力説する。このようにサイードは、「帰るような場所をもったためしのない」エグザイルの立場からウィリアムズにたいする意趣返しを試みている。<sup>3</sup>

この論考において、ふたりの1970年代の試みを読み直してみたい。しかしながら、1970年代はモダニストにとって逆境の時代であった。楽天的に社会の刷新を語ることができた60年代ヒューマニズムが挫折したのち、転覆的要素を回収するシステムへと人びとの関心

<sup>1</sup> Raymond Williams, *Border Country* (London: Hogarth, 1988), originally published in 1960, 351.

<sup>2</sup> Edward W. Said, *The Question of Palestine*, 2<sup>nd</sup> edition, originally published in 1979 (New York: Vintage, 1992), 179.

<sup>3</sup> ‘Power, Politics and Culture: Interview with Edward W. Said,’ in *Edward Said*, ed. Gauri Viswanathan (London: Bloomsbury, 2004), 55.

は移る。そんななか、現状とは違う政治、制度、社会、文化、主体について、ふたたび語り始められるのだろうか。この問いに答えようとしたモダニストをこの論では見てみたい。

## 2. いくつかの始まり

サイードのモダニズム政治学は 1967 年に始まる。それは、公式化された事実を換骨奪胎して、新しく始めることはできないのかという悲愴な問いかけでもあった。サイードは 1967 年の第 3 次中東戦争にかなりの衝撃を受けた。『1967 年 6 月のアラブとイスラエルの衝突—アラブの視点から』(1970) と題された論集に寄稿し、イスラエルが建国以来 20 年も民族国家として存立してきたことを事実として受け入れ、パレスチナに現実的な妥協を迫る論調を舌鋒鋭く批判する。「ある事がらを事実と呼ぶことで、それには最大限の権威が付与される。だが遺憾なことに、事実というラベルは、曖昧な部分、微妙なニュアンス、どっちつかずのもの、根拠の不確かなことを扱うことに伴う不安を隠してしまう」。<sup>4</sup> したがってサイードは、「事実」を装った神話の解体を試みる。まずは神話は神話にすぎないと言うことから始めて、「神話の論理を歴史とすげかえ、自然に見えることを文化の闘争に読みかえ、犠牲者を生産者にし、事実とは抑圧的な言語がうまく作り上げた構造にすぎないことを明らかにする」決意をする。<sup>5</sup> こうしてオリエンタリズムの脱神話化とパレスチナの可視化という同時並行の政治学が開始される。

『パレスチナの問題』が出版されたのは 1979 年、『オリエンタリズム』出版の翌年である。英語で「～の問題 (the question of)」と言うとき、おもに三つの態度が表明されるとサイードは考える。第一に、ある事がらをほかとは区別する態度、第二に、事がらが容易に片づかれない難問であることの示唆、第三に、事がらの存在自体を問う態度である。<sup>6</sup> この最後の態度がサイードにはもっとも重要だった。なぜなら「パレスチナの問題」と言うとき、それは「ネス湖の怪獣の問題」と同じ響きがあったからだ。パレスチナ国家もなければパレスチナ民族もないとするディスコース上の「事実」は、単刀直入にパレスチナについて語り始めることが自体を困難にしていた。そのため 70 年代のサイードは、英文学、概念史、オリエント学のディシプリンなど、パレスチナ問題につながる複合領域にあって多発的に起きる複数の始まりの可能性を探していた。それらを整理したい。

まずは、英文学のディシプリンから。サイードが学位論文のテーマにジョゼフ・コンラッド (Joseph Conrad, 1857-1924) を選んだことはよく知られている。当時、合衆国の英文学ディシプリンは依然として新批評の影響下にあった。この形式重視の方法を使うと、コンラッド作品の複雑な語りや印象主義を思わせるイメージを特徴として抽出することはできるが、なぜコンラッドがこのような語り口を選んだのか、視覚イメージに拘泥したの

<sup>4</sup> Edward W. Said, 'The Arab Portrayed,' in *The Arab-Israeli Confrontation of June 1967: An Arab Perspective*, ed. Ibrahim Abu-Lughod (Evanston: Northwestern UP, 1970), 8.

<sup>5</sup> Edward W. Said, 'Shattered Myths,' in *Middle East Crucible: Studies on the Arab-Israeli War of October 1973*, ed. Naseer H. Aruri (Wilmette: Medina UP International, 1975), 409.

<sup>6</sup> *The Question of Palestine*, 4.

か、書かれたプロセスは何もわからない。サイードはそこが不満だった。コンラッド論を書くサイードは、コンラッドがエグザイルであり、彼にとっての英語は苦労して習得した外国語である点に注目する。そしてコンラッドは「[英語を] 習得し、勝ち取り、生きていくために奮闘しながら・・・負担になる先入観をもたずに、地図のない土地へ分け入った」とサイードは言う。<sup>7</sup> この多分に感傷的な探検者のイメージは、サイード自身の個人的な体験を連想させながら、サイードのコンラッド論では繰り返されている。強調されている点はふたつある。ひとつに文学テクストを閉じた構造をもつ完成品としてとらえるのではなく、書き手が素材と戦闘する労働のプロセスととらえ直すこと。もうひとつ、「負担になる先入観」つまり先行研究や文学史を持ち合わせていないエグザイルこそ、「始める」強みをもっているということであった。

このような「始める強み」をもって、領域横断型の文学概念史研究を試みた先達がいないわけではなかった。エーリッヒ・アウエルバッハ (Erich Auerbach, 1892-1957) である。彼はナチスの迫害を避けるためトルコに逃れたユダヤ人エグザイルであったが、西欧の文化伝統から切り離された経験を強みとして『ミメシス』(1946) を書いた。亡命中の彼は資料が手に入らないという逆境のなかで、手に入る資料をもとに組み立てた全体像を描くことに努める。ただ、この全体化がうまくいくかは批評家が適切な「出発点(anzatzpunkt)」を選択できるかにかかってくる。サイードは言う。「アウエルバッハは・・・じっくり考え抜いて「出発点」ということばを使ったと思う。こうして始めるこの構成的な、いや建設的な意味合いが強調される」。<sup>8</sup> サイードは、アウエルバッハの「出発点」の例として、17世紀フランス文学の慣用句「宮廷と市 (la cour et la ville)」を挙げている。この空間を指示する名詞と名詞の組み合わせがなぜ「教養ある公民」を意味するのか、アウエルバッハはそこに疑問を抱き、この意味を成立させていた17世紀フランスの社会状況と人びとの現実感覚を明らかにする。<sup>9</sup> このようにテクストに疑義を挟んで、失われた全体像を組み立てる批評家の営為に、サイードは「始まり」の可能性を見たのだった。

人文科学に強烈な衝撃をもたらした『オリエンタリズム』は脱神話化の試みであった。そこで扱われるエルネスト・ルナン (Ernest Renan, 1823-1892) のようなオリエンタリストは、究極的にはオリエントを所有し、支配したい一心で、貪欲にオリエントを知ろうとした。これとは別のオリエンタル表象は不可能だったのか。サイードはそれを探すうち、レーモン・シュワブ (Raymond Schwab, 1833-1956) という無名のオリエント学者を探し当てる。そしてシュワブの場合、あくまでオリエントへの純粋な関心からそれを探求し、西洋とオリエントとのあいだに文化的に対等の化学反応を目指したと、サイードは言う。「シュ

<sup>7</sup> Edward W. Said, *Joseph Conrad and the Fiction of Autobiography* (Cambridge, Massachusetts: Harvard UP, 1966), 63.

<sup>8</sup> Edward W. Said, *Beginnings: Intention and Method*, 2nd edition (London: Granta, 1997), originally published in 1975, 68.

<sup>9</sup> Erick Auerbach, *Mimesis: The Representation of Reality in Western Literature*, trans. Williard R. Trask (Princeton: Princeton UP, 1968), originally published in 1946, 364-5.

ワブにとって、文化に変化を与え編成する担い手や主役は学者である。なぜなら文化の変成はひとが新しいことを知りたくなつて、それを整理したいときに起きるからだ」。<sup>10</sup> ルナンが権力の御用学者になつていると手厳しく批判するのと較べると、ナイーヴなまでにサイードはシュワブに肩入れしているように見える。しかしそれも、依然として支配的なオリエンタリズムを無効にする企てを始めるために、学者が選んだ一手にほかならない。

### 3. 起源と始まり

これまで、英文学、概念史、オリエント学のディシプリンなどの領域で、サイードがどのような「始まり」を模索したかを述べてきた。ここからは「起源」と「始まり」を明確に区別し、後者の可能性を探った著作『いくつかの始まり』(1975)を中心見ていくたい。

この著作や同じ時期の書評で、サイードはハロルド・ブルーム (Harold Bloom) が『影響の不安』(1973) を発表したことを歓迎している。新批評が支配的な英文学風土のなかで、先行する強い詩人と後続の弱い詩人と競争 (agon) がまさにテクストにおいて繰り広げられているという「影響の不安」論は、サイードの目に新鮮に映つた。ただ、それだけではない。サイードはこの発想をポストコロニアル状況に移植しようともしていた。『いくつかの始まり』執筆の経緯について尋ねられたインタビューに答えて、サイードはこう述べている。「明らかに彼ら〔アラブ世界の詩人や作家〕は、マルクス主義と植民地主義とを作り出した文化を叩くのに、自分たちもマルクス主義その他の理論を使わざるをえないし、しかもそれを遅まきに学んだという状況に悪戦苦闘している。このような興味深い状況では、オリジナリティもまた違う意味をもつ」。<sup>11</sup> そして、宗主国と植民地という傍系の関係であるかぎり、直系の子が偉大な父に感じるようなオリジナリティの呪縛はないと考える。確かにアラブ世界の作家たちはよじれた「影響の不安」を感じている。だが同時に、彼らは権威をもつた起源から比較的自由でいられるし、「始まり」を語ることもできるかもしれない。サイードの展望は広い。

総じて70年代の批評家たちにとって、「起源」は究極的にはロゴスに重なるものであり、悩ましい問題であった。そんな折、サイードも自ら認めているが、ミシェル・フーコー (Michel Foucault, 1926-84) の知の考古学など構造主義理論の発展は、当時の彼に大きな励みとなつた。『いくつかの始まり』の第5章は構造主義理論を解説した章だが、そのなかでサイードは合奏のイメージを使って、こう述べている。

構造はひとたび発見されると、それが最初から「そこにある」と言いつづける以外に、それが存在する根本的理由を示すことはできない。そこで、きわめて重要なことに、相互に作用し合う部分がアンサンブルを構成した結果、構造が「起源」に取つてかわり、

<sup>10</sup> Edward W. Said, 'Raymond Schwab and the Romance of Ideas,' *Daedalus* Vol. 105, No. 1 (Winter, 1976), 160.

<sup>11</sup> 'Power, Politics and Culture,' 31.

秩序だった諸関係が動き奏で始める。単声からなる本源は拡散するシステムの網に取つて代わる。<sup>12</sup>

サイードの言うとおり、構造主義はひじょうに巧みに「起源」を沈黙の零度に置き換える。『監獄の誕生』(1975)を書くフーコーは、狂気が社会から放逐される状態（おもに西欧中世の状態）を零度の状態とみなし、狂気が囲い込まれ監視される近代社会という地層をおもな関心事とする。そして、その地層のなかでディスコースが編成と再編成を繰り返すことで、権力もまた再生産されるプロセスを明らかにしたのだった。

後にサイードが『オリエンタリズム』を執筆する際に、フーコーの方法を援用したことは知られているとおりだ。しかし、サイードはフーコーの方法に飽き足らなさを感じていた。彼はこう批判する。「構造主義者が書いたものを読んで思うのだが、構造主義批評の要点は、生命と活動の原動力、〈能動知性 (forma informans)〉、それに意図が完全にシステムに取り込まれているという点である。これは、始まりには能動的な潜在力が働くことを極端に過小評価した結果出てきた発想だと思う。というのも、始まりはシステムを考えたい構造主義者にとって厄介な問題だからだ」。<sup>13</sup> 確かに構造主義の発想によって、ある時代を覆う認識や知、それに支配のシステムは明らかになつても、時代を動かす動力学は見えこない。そういえば、70年代のウィリアムズも同じことを指摘していた。「文学史」という静的なシステムを批判して、彼はこう述べた。

文学史を学ぶことが積極的に奨励される。それも変化ではなく多様性を、静的な全体に収まる一連の多様性を知るようにと促される。つまり、この時代の特徴はこうで、別の時代の特徴はああだという具合にだ。すると経験で知ったかのように、この時代と別の時代を知っているような気になる。だが、このつなぐ「と」はけつして強調されることはないか、せいぜい一時的な変種として理解されても質的な変化が起きていると考えられることはない。<sup>14</sup> (強調筆者)

ウィリアムズは伝統の選別という意図を、サイードは始めるための意図を考えることで、構造主義に欠けている点を補完しようと試みていた。

しかしながら、意図も主体も呑み込んでいくシステムのなかで、はたして始まりは可能なのか。語らされることなしに語ることはできるのだろうか。この問題に出したサイードの答えのひとつが、養子縁組という関係性の追求であった。サイードのキー概念として知られる養子縁組関係。おそらくサイードはこれをコンラッド研究時代から温めていたよう

<sup>12</sup> *Beginnings*, 327.

<sup>13</sup> *Beginnings*, 319-20.

<sup>14</sup> Raymond Williams, 'Literature and Sociology: In Memory of Lucien Goldmann,' *New Left Review*, No. 67 (May-June 1971), 7.

に思える。コンラッドの『個人的記録』(1919) のなかに、彼が英語でものを書き始めた経緯にふれた記述がある。彼は英語を自ら選択した意識はなかったことわった後で、英語を使うとは養子に行くようなものだったと言う。「そう、養子縁組 (adoption) があった。だけれど、わたしから英語という天才の養子になりに行ったのだ。たどたどしい段階を過ぎるとすぐ、英語はわたしを完全に養子としたので、まさしく英語の語句がわたしの気質にじかに作用し、まだ形成期の性格を作り上げたのだった」。<sup>15</sup> 子どもの言語習得と成長のたとえが使われていて興味深い。イギリスに生まれた子どもは両親が使うことばを模倣するだろうが、エグザイルの養子は模倣を別の方法に置き換える。サイードはコンラッドから得た着想を『いくつかの始まり』では概念化する。「前者の一連の活動は血統由来で、本源や起源に縛られ、模倣を旨とする。後者の活動に当てはまる諸関係は補足と近接である。本源のかわりに意図的な始まりが必要だし、物語るかわりに文を組み立てなければなければならない。わたしは20世紀にものを書くうえで、このシフトが何よりも大事だと思う」。<sup>16</sup>

今まで見てきたように、エージェント（主体）が「始まり」を起動するという発想を、モダニストのサイードは捨てていない。そのエージェントに彼が選んだのが、先にふれたエグザイル作家コンラッドであった。サイードは、『ノストローモ』(1902) の公刊がそれまでの12年におよぶ作家の制作上、金銭上の危機に仕切りを設ける「始まり」だったと考える。南米の銀鉱山都市スラコはクーデター勃発のため都市基盤を失い、登場人物たちは物語を書き始めるかのように将来の展望に向けた出発点を定めなければならない。とりわけサイードは、ノストローモとデクーが銀塊を反乱軍の手から守るためにそれを舟に載せて脱出する場面に注目する。名声を唯一の価値として動くノストローモの行動力とデクーのコスモポリタンらしい複眼的な知性。サイードによれば、この両者の葛藤はコンラッドの作家としての葛藤でもあり、彼はデクーを自殺させることで行動的な出発を図る。「先立つ12年間の苦悩する姿を公的に振り払って・・・新しいコンラッドが登場する。この新しい人物は、デクーが死んだことをこれ幸いにノストローモが手にした成功に映し出される。微笑を絶やさぬ公人と成りおおせるが、新生スラコでの彼の地位は銀塊の隠匿という用意周到な奸計の上に成り立つ。ノストローモが行動的な生き方をいくらか理想化したものとしても、彼は公的な顔が虚偽であることを暴く批評でもある。『ノストローモ』は新局面の始まりである」。<sup>17</sup> しかしそれは、作家が社会の一部であることを隠して、どこにもない場所から社会を模倣することの虚偽を暴き、自己を否定する暗い新手であった。

それにしてもコンラッドの小説では、語り手は語り始める口実をなぜくどくどと述べるのだろうか。この特徴もコンラッドの「始まり」へのこだわりと深く関係している。オーラルの語りの場面はいつも身体的で、語り手の口唇の動き、口のまわりの筋肉の収縮と弛

<sup>15</sup> Joseph Conrad, *A Personal Record*, VI, vii-viii. Cited from Edward W. Said, 'Conrad: The Presentation of Narrative,' *Novel: A Forum on Fiction*, Vol. 7, No. 2 (Winter 1974), 123.

<sup>16</sup> *Beginnings*, 66.

<sup>17</sup> *Beginnings*, 131-2.

緩、それを見ている聞き手たちがいるはずである。全知の語りによって社会は模倣することができるという文学慣習では、この「始まり」の場面を現出させることはできない。コンラッドには「視覚的なものが第一だという信念と書かれたことばで模倣が可能なのかという深い疑惑」があったとサイードは言う。<sup>18</sup> サイードの読みでは、コンラッドは語りの場面を現出させるためにいろいろ試みている。『ロード・ジム』では尋問が、『ノストローモ』では歴史的な報告が、『闇の奥』では方法を意識した探索が、『西洋の目のもとで』では翻訳が、『密偵』では皮肉な調査が、といった具合である。(『密偵』では、現場 (site) を割り出すことと視覚 (sight) に訴えることがかけてあると言う。) かくしてコンラッドにとって書くことは「継承することではなく発見・開陳すること」になる。<sup>19</sup> 社会を模倣し、模倣の慣習を継承するのではなく、英語では語りえない場所=視覚を発見し開陳しては、その行為を繰り返す「複数の始まり」となるわけである。

#### 4. 始めるために意図する

ウィリアムズの『田舎と都会』(1973)、フーコーの『監獄の誕生』(1975) それにサイードの『オリエンタリズム』(1978)。これらの著作をわたしたちはひとつのカテゴリーに收め、ディスコース研究の書だと考えてしまいがちだ。フーコーの場合、テクストとはひとりの作家がとりまとめたものでも、ある時代の反映でもなく、言明の重なり合いが生み出すディスコース編成 (discursive formation) であった。『田舎と都会』は、「村」なり「都会」のことばをとおしたイメージ作りを分析し、このイメージが時とともに変化しつつも、あるバイアスを維持しつづけたことを活写した。サイードもまた『オリエンタリズム』の序言で、西洋がオリエントを支配する手段となつた巨大な文化体系を理解するためには、オリエンタリズムをディスコースとみて検証する以外にないと、明言している。<sup>20</sup>

しかし、わたしが主張したいのは、ウィリアムズもサイードもフーコーの理論的なピュアさを獲得できて (して) いないということ、したがって彼らのディスコース研究にはモダニストの主体感覚が濃厚に混濁しているということだ。まずはウィリアムズから見てみたい。1960 年代にコミットメントや連帶の困難さを骨身にしみて感じた文化・社会批評家たちは、1970 年代には観察し描写する主体を消去するのに力を注いだように思える。コミュニケーション研究も、かつては対象にたいして観察者がどう関わり、どう評価するかに配慮していたのに、70 年代には自然科学者の観察を理想に掲げ、観察者は見えなくなる。ウィリアムズはこうした変化を察知して、『テレビジョン』(1975) のなかでこう書いた。

この変化はしごく簡単にラスウェル [Harold Lasswell, 1902-78 米国の政治コミュニケーション学者] が提唱した定式に見いだせる。彼はコミュニケーション研究の方法論的原則と

<sup>18</sup> ‘Conrad: The Presentation of Narrative,’ 120-1.

<sup>19</sup> *Ibid.*, 123.

<sup>20</sup> Edward W. Said, *Orientalism* (New York: Vintage, 1978), 3.

して、「だれが何を、だれに向かって言い、それがどんな結果をもたらしたか」を聞くことだと述べた。この問い合わせで排除されているものがある。意図とそれにかかわる現実の社会と文化の全プロセスである。そこで問い合わせを修正して「だれが何を、だれに向かって、何のために言い、それがどんな結果をもたらしたか」と問い合わせ直してみたらどうだろう。<sup>21</sup>

「何のために言うのか」という問い合わせは、どうしても「始まり」と「意図」とをアジェンダにもちこむ。これは70年代の思想風土では忌避されたことでもあった。にもかかわらず(いや、だからこそ) ウィリアムズはこの本のなかで、社会や文化がどちらを向いて進みたいのかを議論の出発点としたのだろう。

さてここで、サイードの『いくつかの始まり』の副題は、「意図と方法」であったことを思い出してみたい。サイードはフーコーの方法にならい、意味生成の網の張られ方に注目するのだが、網を張り始めようとするそもそもの意図をとらえたいという意欲もまた表明している。この本のなかで彼は「意図」をこう定義している。

「意図」ということばを使うことでわたしが言いたいのは、ある独特な方法で何かを始めたいというそもそもその欲求のことだ。その欲求は意識されるかもしれない。されないかもしれない。しかしともかくも、欲求は言語をとおして湧きあがってくるもので、言語をとおして(ほとんどと言っていいぐらい) かならず始まりの意図の兆候を何らかのかたちで示し、いつも意味生成に意図的にかかわり合う。ある著作ないし書かれた作品にかんして言えば、始まりの意図とは、作品が展開するのに欠かせない、創られた「包含性」にほかならない。<sup>22</sup>

つまり始まりの意図はテキストが書き始められる瞬間から書き終えられる瞬間まで、そのプロセスを柔らかく包み込むものであり、書き手につねに意識されているわけではないと言うのだ。彼はポール・ド・マン (Paul de Man, 1919-83) の「盲目と明察」の概念を使って、意図を書き手自身が意識しない盲目の瞬間が、その意図をもつとも意義深い明察の瞬間にすることもあると言う。「わたし流に言うと、意図とは盲目と明察との相互作用である。別の言い方をすると、意図とは独りよがりの個人的な見方と共同体の関心とを結ぶ鎖である」。<sup>23</sup>

このようにサイードは、「始まり」にはエージェントの意図がまずありきだと考えたが、それを理論的にも補強するために 18世紀の歴史学者ジャンバッティスタ・ヴィーコ

<sup>21</sup> Raymond Williams, *Television: Technology and Cultural Form*, 2<sup>nd</sup> edition (London: Routledge, 1997), originally published in 1975, 119-20. このことを日本で最初に指摘した研究に、最近出版された高山智樹『レイモンド・ウィリアムズ—希望への手がかり』(彩流社、2010) がある。415頁を参照。

<sup>22</sup> *Beginnings*, 12.

<sup>23</sup> *Ibid.*, 13.

(Giambattista Vico, 1668-1744) のアプローチを学び直す。実際『いくつかの始まり』の結びは、ヴィーコの再評価で締めくくられる。「この本〔ヴィーコの主著『新しい学』〕の主要な命題とは、始まりは意識的に意図的で、生産的な活動であり、さらにはこの活動をめぐる環境には喪失感覚もつきまとうというものである」。<sup>24</sup> 繰り返しになるが、始まりは起源ではない。起源はそこから派生するものすべてを求心的に回収する。対照的に、始まりとは書くプロセスで意味や性格が変わって元のものを失ったとしても、そのことを受け入れる活動である。しかし人間精神は弱く、適応能力が不全なので、この活動には多大な困難がつきまとう。こうした困難のなかでも「始めようとするそもそもの意志がひとたび働けば、実に多くの変更が可能だし、認識できる」<sup>25</sup>と断言した『新しい学』に、わたしたちは学び直さなければいけない。こうしてサイードは『いくつかの始まり』を書き終えた後、オリエンタリズム・ディスコースの変更に着手し始める。

『オリエンタリズム』もまた、表向きはフーコー流のディスコース研究の様相を見せながらも、オリエンタリズムというディスコース編成体が「人間の意図した仕事」であることを明らかにしようとする。彼はフーコーと同じように、権力がミクロ・レベルで飛散・浸透するプロセスに関心を寄せたが、フーコーとは異なりそのプロセスにエージェントを絡ませないではいられなかった。『オリエンタリズム』の序言で、サイードはフーコーとの方法論上の違いを述べている。

だけれども、わたしは大きな影響を受けたミシェル・フーコーとは違って、オリエンタリズムのようなディスコース編成体を構成するテクスト群、それも特に気をつけて見なければ誰が書いたかわからないテクスト群にも、個々の書き手によって決定的な刻印が施されていることを信じて疑わない。わたしが分析する巨大なテクスト集合体に統一性が見られるのは、おそらくテクストどうしが頻繁なほど相互に参照し合っている事実のためであると思う。詰まるところオリエンタリズムは、書かれたものや書き手を引用するシステムにほかならない。<sup>26</sup>

実際、19世紀フランスのオリエンタリストの営為を論じた本論でも、ネルヴァルやフローベール (Gérard de Nerval, 1808-55; Gustave Flaubert, 1821-80) など主要なオリエンタリストたちは、オリエントで実地の見聞を得たにもかかわらず、先人のオリエンタリスト、サシやレイン (Antoine Isaac Silvestre de Sacy, 1758-1838; Edward William Lane, 1801-76) の仕事を好んで引用し、先人の姿勢に忠実に加筆修正を行ったことが論じられている。<sup>27</sup>

1970年代のウィリアムズの仕事もサイードの仕事も、一見ディスコース分析の体裁を取

<sup>24</sup> *Ibid.*, 372.

<sup>25</sup> *Ibid.*, 363.

<sup>26</sup> *Orientalism*, 23.

<sup>27</sup> *Ibid.*, 176-7.

りながらも、「意図」に拘泥するあまりディスコースの破れ目を見損なっているという批判もある。たとえば潜在的なオリエンタリズムはオリエントを永劫不变の魅惑的な女性身体ととらえたい潜在的な欲望をもつづけてきたが、顕在的オリエンタリズムの政治文書のなかでは西欧の手術を待つ瀕死の病人として表象される。これはディスコースのほつれかもしれないが、サイードは最終的に、オリエント支配を優先してディスコースのほつれも継ぎ目が見えないように縫い合わされていると考えた。ホミ・K・バーバ (Homi K. Bhabha) はこれを批判して、このように「植民者権力の意図と一方向性」を強調することが、実はこのディスコース編成体の脆さを暴く機会を奪っていると言う。<sup>28</sup> バーバの指摘は鋭いが、東インド会社設立から第3次中東戦争につながる帝国主義支配の現実が隠然、顕然とあると感じていたサイードにとって、その「始まり」を問題にする以上、意識的でもあり無意識的でもある「始まりの意図」を問題にしないわけにはいかなかったのだ。

ウィリアムズの『ボーダー・カントリー』のエンディングについて、もう一度考えてみたい。よくよく見ると、エグザイルが終わるためには、ひじょうに困難な条件がひとつ付けてあるのがわかる。田舎と都会とで物質的生活、コミュニティ感覚、知の形態が違うということは、価値を測る尺度が違うということであり、異なる尺度と尺度とのあいだで「距離を測る」とはいったいどういうことなのか。<sup>29</sup> ウィリアムズらしい謎かけである。2008年に公刊されたウィリアムズ評伝のなかで、ウェールズの歴史学者ダイ・スミス (Dai Smith) は、ウィリアムズの遺族より託された遺稿や手帳を調べて、『ボーダー・カントリー』の成立過程を詳らかにした。<sup>30</sup> これによると、ウィリアムズは1947年に最初の草稿『プリンルーイッド』を書いて以来、加筆と修正、タイトルの変更を繰り返しながら刊行まで13年にわたる煩悶の日々を過ごしていた。手帳には興味深い痕跡が残っている。1957年度版の草稿を書き終えたとき、ウィリアムズはタイトルを『共有されるテーマ』に変えるが、それまでのタイトル『エグザイルの終わり』を大きく線で消している。傍らに走り書きがあり、「『エグザイルの終わり』などと呼ぶな。じゃあ、おまえが閉め出されたのは何のためだったのか」とある。<sup>31</sup> 大学公開講座の講師としてオクスフォードに移った1960年のウィリアムズと1967年のイスラエル軍による祖国侵攻を経験したサイードと。ふたりのエグザイル状況は確かに異なる。しかし、エグザイルを生み出す条件を政治的に消し去るために、エグザイルの知性と意志をもつづけようとした点において、ふたりはともにモダニストであった。

<sup>28</sup> Homi K. Bhabha, 'Difference, Discrimination and the Discourse of Colonialism,' in *Edward Said, ed. Patrick Williams*, vol.3 (London: Sage Publications, 2001), 395-6.

<sup>29</sup> 田舎と都会というとらえ方自体が、都会の尺度に基づく認識であることを、後にウィリアムズは *The Country and the City* (New York: Oxford UP, 1973) で実証することになる。

<sup>30</sup> Dai Smith, *Raymond Williams: A Warrior's Tale* (Cardigan: Parthian, 2008).

<sup>31</sup> *Ibid.*, 444.